
オムライス

辰巳尚来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オムライス

【Nコード】

N7846D

【作者名】

辰巳尚来

【あらすじ】

腹の虫が限界の状態で帰宅、中学一年で初めて「オムライス」作りにチャレンジする。果たしてどうなるのか？

子供の頃から一番好きな物は何か？

やっぱり「オムライス」かなあ。

あの黄色いタマゴと赤いケチャップのコラボレーションの見た目は子供心にキラキラ輝いていた。

中学一年の時だった、そいつに初めて挑戦状を叩きつけた。

いや、叩きつけられた。

夏休みの初めの頃だったと思う。

部活が早く終わって家に帰ってきたら、誰も居ない。

めっちゃめっちゃ腹減って帰ってきたのに、母ちゃん居ないなんて！

冷蔵庫から麦茶を取り出して口飲みで一気に飲んだ。

母ちゃんが居たら怒られるが居ないというのはこう言う楽しみはあった。

喉の渴きは収まったが、腹の虫は収まる所かひどくなっていた。

カップ麺を探したが見つからず、冷蔵庫をあさった。

それなりに食材と呼ばれる物はあったが、その時の俺にはそれは食べ物では無かった。

だが、何も出来ない中坊でも目玉焼きくらいはできるはず。

おもむろにタマゴを取り出した。

しかしながら、そこで考えた。

目玉焼きくらいじゃ腹は膨れない、むしろ火に油を注ぐ様な物だ。

そして俺は無謀な挑戦をする事した。

まあ、今思えばだがね。

何故そこで「オムライス」だったのか？

それは単に簡単だと思ったからに違いない。

何とも無知な男だ。

その時の俺は理由などない自信があった。

だって母ちゃんはいつもシャシャッとフライパンで作ってくれる。

俺はフライパンを用意し、考えた。

まずはタマゴはいる。そして中身はご飯、ケチャップライスだ。

ここで第一関門！

ケチャップライスの具は何だ？

ニンジンか？タマネギ？

ん！チキンライスって言うよなあ。

て、言う事は鶏肉だよなあ。

冷蔵庫から鶏肉とニンジンとタマネギを取り出した。

いよいよ戦闘開始！

まな板に鶏肉を置き、包丁で切りはじめた。

「なんじゃこりゃ！」

松田優作か！

鶏肉は自分が描いたようには全く切れず、包丁は鶏肉の上を滑るばかりで、ほとんど切れてない。

格闘すること十数分、切れたと言うよりちぎれた感じだった。

すでに心が折れそうになっていたが、ニンジンを手に取り切り始めた。

さっきの鶏肉と違い切れる事に感動すら覚え、心が復活！

ただ、これも想像とは違う大きさだったがそれは仕方ないと思い、タマネギを手に取ったが、無理だろうと言う誰かの囁きにあっさり諦める。

冷凍庫からご飯を取り出し、レンジで“チン！”

これはおてのもの、フライパンに油をひき鶏肉を入れニンジンも入れた。

炒めるだけなら簡単とばかりに鼻歌混じりにフライパンを振る。

ご飯を入れ、塩と味の素を入れた。

ここでどんな味になってようが、今から入れるケチャップで全てはOKになると信じていた。

臭いだけはそれぼっくなっていた。

これだけ食べてもよかったし、その方が腹の虫は収まったに違いないが、初志貫徹！

俺はタマゴに取り掛かった。

ボールにタマゴを割り入れた。

一個目が綺麗に割れて調子に乗り二個目は殻ごとボールの中へ。

以外と殻が取れず悪戦苦闘。

タマゴをかきませフライパンへ。

”じゅーっ”といい香が漂った。

フライパン一面に敷いたタマゴを見ていた。

もうすぐその愛らしい姿を現す「オムライス」を想像していた。

ところが、事態は一変した。

タマゴはまだ真ん中が液体のままなのに、端の方が焦げだしている。それと同時にフライパンから煙りが上がり始めていた。

「やばいー！」

箸でタマゴをめくろうとしたが、上手く剥がれず折れるわ破れるわ、真っ黒に焦げてるわ！

最悪の事態になった。

中学生に火加減などみじんも頭に無かった。

ここで諦める訳にはいかない。

新たなタマゴをボールに割りもう一度チャレンジ。

今後は慎重にタマゴを焼き始めた。

焦げない様に端を気にしつつタイミングをはかった。

そしてケチャップライスを投入！

もうすぐあの麗しいの「オムライス」が出来上がる。
心は弾んでいた。

見よう見真似でフライパンを返して巻こうと取っ手を持つ左手首を拳で叩いた。

次の瞬間、予想だにしない光景が広がった。

手首を叩いてフライパンが返り、中のケチャップライスはタマゴに巻かれる事なく、外に飛び出し、タマゴは崩れ落ちた。

「あつ！」

力加減などわからなかった。

こぼれ落ちたケチャップライスを慌てて拾い上げようとした。

「熱っ！」

ガスレンジの周りがこんなに熱い事を初めて知った。

今考えればケチャップライスの量も半端なく多かつたし、無理もない事態だった。

もう心の炎は灯になっていた。

だが、俺は諦め無かつた。

最後のタマゴ二個を手に最後のチャレンジ！

より慎重にタマゴを焼き、ケチャップライスだか何だかわからなくなった物を入れた。

今後はフライパンを返す様な高等テクニクはやめて、箸でゆつくりずらして動かし、フライパンの片側に寄せた。

人間とは学習する生き物だ。

もうそこにゴールテープが見えてる。

だが若さとは恐れを知らない。

フニイシユは綺麗に決めてやろうと凝りもせずフライパンを返そうとした。

人間とは失敗を繰り返す生き物だ。

見るも無惨にその「オムライス」らしき黄色と赤色に焦げ茶色の物は打ち上げられた謎の生物の様にフライパンの中にあった。

心の炎は消えた。

それでも腹の虫は収まらず、俺はそのお世辞にも「オムライス」とは言えないケチャップライスに焦げたタマゴが混じった熱くもあり、冷たくもあるものを掻き込んだ。

味は食べられる程度の物だった。

腹の虫は収まったが闘った疲れが一気に押し寄せ、俺は眠りについた。

その後、帰ってきてきて台所の惨劇を見た母ちゃんにめっちゃ怒られた事は言わずともわかるだろう。

あれから「オムライス」に対する考えは180度変わった。

今でも大好きな食べ物とは聞かれたら迷わず答える。

「オムライス」はチャンピオンだ。

今では自分の息子に「オムライス」を作る事がしばしばある。

あの時の闘いは今だに作る度に思いだす。

中学一年の夏休み、諦め無かった闘いを…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7846d/>

オムライス

2010年10月9日17時13分発行